

〈書評〉

しゅう くんしよ
周 勳初 著／高津 孝 訳

『中国古典文学批評史』

(勉誠出版、2007年)

大 村 和 人

Book Review

Zhou Xun-chu:
Short History of Chinese Literary Criticism,
translated by Takashi Takatsu

Omura Kazuhito

読者に「開かれた」中国古典文学批評の歴史

1、はじめに

中国語圏の大学の中国文学科には、「古典文学」「近現代文学」とは別に「文芸理論」や「文学批評史」というコースがある(注1)。このことから、「文学批評」「文学理論」「文学思想」が、中国語圏における文学研究では一つの大きな研究分野を形成していることが分かる。このような状況を反映してか、中国語圏の学者によって中国語で書かれた「中国文学思想史」や「中国文学批評史」の類の書物は汗牛充棟の観を呈している。

しかし、日本語で読めるその類の書物は少なく、比較的手に取りやすいのは青木正児氏の著書(注2)と伊藤虎丸氏他編『中国の文学論』(注3)のみ、という状況が長らく続いた。念のために補足すると、各論に関する研究は日本でも盛んであり、論文となると枚挙に暇がないし、叙述の対象をある時期に限って、その間の文学思想の変遷を述べた書物も少なくない。しかし、先秦時代から清代あるいは近現代までをも取り扱った、所謂「通史」に類する書物は非常に少なかった。そうした状況を打破したのが本書である。

(1) 例えば、北京大学の「中国語言文学系」の文学分野のコースとして、「古代文学(清末以前)」「現代文学(日本語で言う近代文学)」「当代文学(日本語で言う現代文学)」「民間文学」「文芸理論」「古典文献」がある。他に、復旦大学の「中国語言文学系」の文学・文化分野のコースとしては、「民俗学」「文芸学」「古典文献学」「古代文学(清末以前)」「現当代文学」「比較文学と世界文学」「文学批評史」「芸術人類学と民間文学」「電影学(映画学)」がある。

(2) 『支那文学思想史』、岩波書店、1943年。後、春秋社『青木正児全集』第1巻収録。青木氏は1887年山口県生まれ、1964年逝去。青木氏の中国文学思想に関する専著として、他に『清代文学評論史』(岩波書店、1950年)もある。

(3) 汲古書院、1987年。伊藤氏は1927年東京都生まれ、2003年逝去。

2、作者について

本書の著者である周勛^{しゅうくんしよ}初氏は1929年、上海市の生まれである。南京大学中文系卒業後、長らく同大学中文系で教鞭を執られた。

主なご専門は先秦時代から唐宋時代にかけての文学である。主なご著書で取り上げられた作品や作者を挙げれば、先秦時代の楚国の祭祀歌とされる「九歌」、漢魏晋南北朝時代の様々な作品や詩人、唐代詩人の李白・高適・白居易、唐代の小説などがある。他に『韓非』のような先秦時代の一思想家に関する著書もあるかと思えば、『冊府元龜』という北宋時代の歴史学の「類書」^(注4)の校訂も何人かの学者と共に手掛けられたこともある。以上のように、周氏の業績は中国の古典文学だけでなく思想や歴史の分野にまで亘っている。

3、本書の構成と特徴

本書は、周氏が1981年に長江文芸出版社から出版した原書『中国文学批評小史』の近代部分^(注5)を除いた日本語訳である。

本書は時代順に「先秦の文学批評」「漢代の文学批評」「魏晋南北朝の文学批評」「隋唐五代の文学批評」「宋金元の文学批評」「明清の文学

批評」という6つの編によって構成されており、各編が更にほぼ時代順に幾つかの章に細かく分かかれ、各章で重要な批評家の文学思想や、或いは特徴的な風潮や流派などが取り上げられている。この点はその他の多くの類書とほぼ同じである。

巻頭の「題記」において、著者は本書執筆において留意したという以下の6つの注意点を挙げる。

- (1) 「中国古代文学理論批評の歴史的発展の流れを描き出」すよう努めた。
- (2) 「創作上の現実」や「当時の社会の政治、思想、芸術等その他の要素の影響」も考慮し、「総合的な研究」を行うよう努めた。
- (3) 批評用語の中には現代人にとって理解し難いものがあり、「現代の文学理論」で通用している語を用いてその意味するところを説明しなければならない。しかし、それらの語は西洋から取り入れられたものであるので、中国の文学批評用語を理解するには適切でない場合もある。この問題に配慮しようと努めた。
- (4) 文学思想の「論点の創造性」に特に注意した。
- (5) 中国の文学思想の特徴の一つが「語録体」であり、その真意を理解することは専門外の読者には難しいので、本書では「多様な方法

(4) ここでいう「類書」とは、現代日本語で使われる意味とは異なり、「百科事典」を指す。『冊府元龜』は北宋の真宗皇帝の勅命を受けた王欽若や楊億らによって編纂され、歴代の君臣の事跡を集めてそれらをテーマ別に分類したものである。

(5) 参考までに、日本語訳版で削除された部分の目次を以下に引用する。なお、原書では中国語簡体字で表記されているが、ここでは日本語常用字に改めた。

第7編「清代中後期の文学批評」

第1章「地主階級改革派の文学見解」

第2章「太平天国的文学主張」

第3章「資産階級改良派の文学理論」

(1)「翻訳理論」 (2)「新民体」 (3)「詩界革命」 (4)「小説体革命」

第4章「資産階級革命派の文学思想」

第5章「王国維集資産階級美学之大成」

(1)「生平簡介」 (2)「《紅樓夢評論》」 (3)「《宋元戯曲考》」

を採用」して読者の理解を助けるよう努めた。

- 1) 重要な論点については「解剖学的な精緻な分析」を行った。
 - 2) 批評用語は典型性を持つ事例を挙げた。
- (6) 本書で述べられているのは「探究途上の未熟な意見」であり、「多くの読者と学者の批判を得られること」を望む。

また、訳者の高津孝氏は、「あとがき」で蒋凡・汪涌豪両氏による書評を参照しながら、本書の以下の3つの特徴を挙げている。

- (1) 「中国文学批評、理論の発展的筋道を簡潔に叙述」
- (2) 「文学のみならず、社会、政治、思想、芸術など広い視野に立った総合的研究」
- (3) 「批評史研究と文学史研究の結合」によって、「抽象的議論が生き生きとした具体性をもって読者に提示される。」

訳者「あとがき」の(1)は著者「題記」の(1)と、「あとがき」の(2)は「題記」の(2)と対応しており、本書の大きな特徴であると言える。中でも、「題記」と「あとがき」の(2)は、前述のように中国の思想史や歴史学方面の業績も残す周氏ならではの特徴である。また、「題記」の(3)と(5)および「あとがき」の(3)に関連して、難解な批評用語に対する本書の説明の明解さや平易さの具体例は、大木康氏による書評を参照されたい(注6)。

拙稿では、「題記」(1)および「あとがき」(1)と関連して、本書各編の冒頭でその時代の文学思想が概観されるために、読者が各時代の文学思想の変化の流れと主要な説の特徴や問題点を

把握しやすくなっていることを指摘しておく。

この6編冒頭の概観の部分だけを繋げて読むだけでも、読者は先秦時代から清朝までの文学思想の大まかな流れを掴むことができる。訳者の「あとがき」によれば、原書はもともと『中国古典文学基本知識叢書』というシリーズの中の1冊として企画されたものであるという。各編冒頭の概観も一般の読者を想定して工夫されたものであろう。

また、次も「題記」の(1)(4)や「あとがき」の(1)と関連するが、多くの場合、各思想の後世における継承や発展、あるいは変化の道筋を明示してくれることが特徴的である。優れた詩歌の基準を示した南朝梁の鍾嶸が著書『詩品』で提唱した「比興」説は中国文学思想史上で重要なトピックの一つであるが、本書はそれが唐代の皎然や司空図、南宋の嚴羽、清代の王士禛に受け継がれたと明確に指摘する。更に読者が当該項目を読み進めて行けば、鍾嶸の説がどのように継承され、発展していったかがよく分かる。その他の各項目においても、その説がどの説を継承し、後世のどの説に継承されていったかが明示されることが少なくない。それらを辿ることによって、読者は幾つかの重要な説の継承と発展の大きな流れを把握できるのである。

その他、取り上げる事項の質と量のバランスを取っていることも大きな特徴の一つである。「中国古典文学批評史」「中国古典文学思想史」と題した書物の多くは、ややもすれば、知識人の「正統的」で「雅」な詩歌と散文の制作を支えた思想に目が行きがちであった。しかし、中

(6) 「『おそろしい』批評史—周勳初著・高津孝訳『中国古典文学批評史』」(『アジア遊学』103、勉誠出版、2007年)参照。大木氏は1959年神奈川県生まれで、現在、東京大学東洋文化研究所教授。大木氏は劉勰『文心雕龍』の「風骨」説に対する本書の解説の明解さを示し、「何気なく書かれている一言の背後に、計り知れない読書と思索が秘められている」と評している(149-150頁)。

国文学とはそれだけに限られるのではない。元明清時代には、戯曲や口語体小説、民間歌曲などの「俗文学」、所謂「白話」（話し言葉）文学が大流行した。本書では、それらの「俗文学」の制作を支えた思想についても第6編全11章の中で5つの章が割かれている。この割合は、内容を絞った『小史』にしてはかなり大きいと言える。そして、それらの思想が過去のどのような思想と対峙し、或いはどのような思想を継承し、更に後世のどのような思想に繋がったのかが指摘される。

中国語で出版されている大部の「中国文学思想史」や「中国文学批評史」の類の書物のほとんどは出来る限り網羅的であろうとする。これはこれで研究者にとっては有益であるが、時代順に網羅的であろうとすれば、どうしても視点が拡散してしまう。或いは、著者の専門によって、内容に偏りが生じてしまいがちになる。

前述のように、本書の著者の主な専門領域は唐宋時代までの文学、言い換えれば「雅文学」である。膨大な資料が残されている中国古典文学思想の歴史を1冊の『小史』としてまとめるのに、全体のバランスも考慮しながら、取り上げる項目を取捨選択することは容易なことではない。拙稿の筆者の手元にある原書、2007年復旦大学出版社版の日本語訳対応部分は、目次や「題記」を入れても170頁に満たない。それにも関わらず上記のような細やかな配慮がなされていることに、著者の学識の広さと深さを垣間見る心地がする。

以上は原書の特徴である。海外の書物の紹介

には、翻訳者の尽力も欠かすことができない。本書に見られる大きな特徴の1つは、原書が引用する資料の日本語訳を本文に載せ、注で必ずその原文と出典を明記していることである(注7)。全ての「文学批評・思想史」や「文学史」にこのような配慮が見られるとは限らない。しかし、本書の読者は、引用資料の日本語訳と原文を参照することによって、その言説の主張だけでなく、文体に対する理解も深めることができる。

例えば、南朝齊時代から梁時代にかけて活躍した劉勰りゅうきやうによって著された『文心雕龍ぶんしんちやうりゆう』は、文学理論や作品・作家批評を極めて体系的かつ網羅的に叙述した書物であるが、もう1つの大きな特徴は、「駢文べんぶん」という文体が用いられていることである。この「駢文」とは、形式を重視し、典故を盛り込むことをよしとする文体である。前者の特徴についてももう少し詳しい説明を加えれば、「駢文べんぶん」は後世の人々から別名「四六文」と呼ばれたように、4字句や6字句の対句を多用して句調を整えることを重視する。

1例を挙げれば、本訳書107頁が引用する『文心雕龍ぶんしんちやうりゆう』「序志」篇は劉勰りゅうきやうの著述態度を述べたものであるが、日本語訳は以下の通りである。改行は拙稿の筆者によるものである。

「既成の作品の評価において、

旧説と同じ部分があるのは、決して雷同したわけではない。大勢として異をたてる余地がないからである。

また、旧説と異なる部分があるのは、決してことさら異を立てたのではない。理論的にいって同調できなかったからである。

(7) 興膳宏氏は、本書の書評において、「原著では文中で引用の資料がごく短い場合、必ずしもその出処を明記していない」ことを指摘し、本書がその資料の出典の書物名と原文を注で必ず引用していることを、「厳密で実証的な方針を貫いている」と高く評価している。京都大学文学部中国語学中国文学研究室編『中國文學報』第76冊（2008年10月）190頁参照。興膳氏は1936年福岡県生まれ、現在、京都大学名誉教授。

同調するにせよ、異を立てるにせよ、古今の人を気かけなかった。作品のすみずみまで検討し、ひたすら公平さに努めただけである。」

本書138頁の注が引用する『文心雕龍』の原文は以下の通り。改行は同じく拙稿の筆者による。

「及其品列成文，

有同乎舊談者，非雷同也，勢自不可異也。

有異乎前論者，非苟異也，理自不可同也。

同之與異，不屑古今，擘肌分理，唯務折衷。」

もし日本語訳文だけなら、原文のリズムや整然とした定型性は分かりにくいであろう。しかし、本書には引用資料の訳文だけでなくそれに対応する原文も必ず引用されているので、読者は『文心雕龍』の文体である「駢文」を知ることができるのである。劉勰は『文心雕龍』の別の篇で、文学の内容だけでなく形式の美しさを追究することも主張しているが、彼は同時にそれを実践しているわけであり、読者は原文も読むことによって、彼の主張を総合的に理解できるのである。

同様に、第4編では韓愈や柳宗元、第5編では歐陽修などの所謂「古文運動」の旗手たちの文章の原文も引用されている。彼らは前述のような特徴を持つ「駢文」を批判し、先秦兩漢時代の文章をモデルとした「古文」という文体を創出しようとした。それらと『文心雕龍』の文体とを比較すれば、韓愈らがどのように自らの主張を実践したかも理解できる。

以上のように、本書では、原書の引用資料の原文も引用することによって、読者がその文体も味わい、その主張を総合的に理解できるよう

配慮しているのである。そのことによって、読者がそこから更に先に思索を進めて、新たな知見を得る可能性も開かれる。本書が「ことば」の藝術の批評史に関する書物であるだけに、尚更この配慮は非常に重要で貴重である。

4、最後に

以上のように、本書はポイントを絞って筋の通った内容になっており、読者に中国語圏の文学思想と批評の歴史を分かりやすく明示してくれる書物である。更に、訳注者独自の配慮もあり、読者に「開かれた」、得難い書物となっていることはもう一度強調しておく。拙稿の筆者も読み返すたびに必ず何らかの新たな知見を得ると言っても誇張ではない。

ところで、ここで改めて強調するまでもなく、文学批評とは批評者自身の文学思想を語ることもである。文学批評の歴史を叙述する場合も例外ではない。

本書には次のような口吻が所々に見られる。例えば、本書99頁で『文選』が「駢文」の発展に与えた影響を述べた部分で、著者は「当時にあっても後代にあっても、ひたすら声律、対偶、用事の巧緻さを追究する駢文作家がおり、彼らの存在によって文学は過度に形式を重視するあやまった道に導かれた」（傍点は引用者による）と総括する。あるいは、308頁、「ひたすら主観的感受性を強調」する明代の公安派の欠点は彼らの政治における消極的態度と密接な関連があると指摘し、彼らのような「政治的に軟弱な人間には気迫のこもった革新的な作品は書けない」と断定する。

これらの口吻に対する拙稿筆者の私見は差し

控える。ただ筆者のこれまでの研究経験から一つ明言できるのは、本書に時折見えるこのような口物が、中国語圏の他の学者によって著された類書に見られるものと比較して際立って特異というわけではない、ということである。著者のそれらの口物の淵源と考えられる言説を、著者自身が本書で紹介する過去の言説の中から拾い出すことも出来る。それはどの言説か。これ

らのことはどういうことを示すのか。これらの疑問を解こうとして本書を読み返せば、現代の中国語圏にもある程度受け継がれている「文学思想」、更には「文化」の特徴を理解するための貴重な手掛かりをも本書は与えてくれるであろう。

(おおむら かずひと・本学経済学部講師)